2004年10月(主日C年)

# 10月3日　年間第27主日

ハバ1:2-3, 2:2-4　IIテモ1:6〜14　ルカ17:5〜10

## 1. ハバ

1:2「主よ、わたしが助けを求めて叫んでいるのに、いつまであなたは聞いてくださらないのか。わたしがあなたに"不法"と訴えているのに、あなたは助けてくださらない。」

預言者ハバククの訴えに対して、主は神の救済史の将来に関わる幻を示して、これをだれもが読めるように板の上に記せと言われました。これを現代風に言い換えれば、車を運転しながらでも読めるように大きな看板にディスプレイせよという意味です。そして有名な「神に従う人は信仰によって生きる」(2:4)という言葉が語られました。ここで"信仰"と訳されている言葉は、アーメン(真実)の派生語で、主への忠誠と信頼を意味しています。神の恵みや裁きの実行を人間が指図することが信仰ではない・・・・・、そうではなくてただ神に信頼し、その御業の進行と展開を素直に受け入れることが"信仰"なのだと、主は答えられたのでした。

## 2. ルカ

私たちがキリストに信頼し、神の国の福音を素直に受け入れ、与えられた救いに感謝して生きることは、教会の信仰の伝統的な形であると言うことが出来ます。vv.5-6の使徒たちの逸話は、しばしば語られる"山をも動かす(強い)信仰"(マタ17:20)を持てという話ではなくて、"からし種一粒ほどの(小さな)信仰"で十分である・・・・・、もしそれが本物の信仰であれば・・・・・というのが主旨なのです。救済史の御業は神のものであり、信仰とはその御業への信頼だからです。

私たちキリスト者は、「キリストを信じることだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです」(フィリ1:29)。しかし、その労苦によって神から何か特別な報いを獲得出来ると考えるなら・・・・・。そのように考える人たちのために、ルカは主の語録の中からvv.7-10を加えました。「あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことを果たしたら、"わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです"と言いなさい。」救済史の御業は神のものであり、信仰とはその御業への信頼だからです。

## 3. IIテモ

テモテは、パウロを含む教会の長老たちの按手を受けたとき(Iテモ4:14参照)、霊の賜物を与えられました。私たちはここに、現在のカトリック教会における叙階の秘跡の起源を見ます。彼は使徒パウロのいわば後継者としての権威と役割を受けた指導者として、教会に仕えたに違いありません。彼は使徒パウロの教えをただ機械的に繰り返すのではなくて、「手本として」(v.13)「聖霊によって」(v.14)教会への奉仕のた

めに活かして行くことを命じられました。「わたしと共に苦しみを忍んでください」(v.8) というパウロの言葉は、後に続くすべての時代の司教や司祭にも向けられた呼びかけでありますが、テモテ自身、恐らくパウロの死後 20 年頃に、牢獄から釈放されたと思われる言及が へブ 13:23 に残されています。(へブライ人への手紙は、紀元 81〜96 年の間に書かれたと考えられているからです。)

カトリック教会では伝統的に、聖霊の賜物は聖職位階にある人々の権威を根拠づけるものとして考えられる傾向が強かったため、すべてのキリスト者が等しく聖霊を受けていること(使 2:38, ロマ 8:9 参照)があまり語られて来ませんでした。確かに教会の教導職は大きな権威と役割を主から与えられた人々であります。しかし信徒一人一人もまた、「神に従う人は(自らの)信仰によって生きる」(ハバ 2:4) のです。「キリスト･イエスによって与えられる信仰と愛をもって」(v.13)、(聖伝と聖書によって伝えられた)「健全な言葉を手本とし」(v.13)、“聖霊によって”(vv.7,14)、“信仰によって”(ハバ 2:4) 生きることは、私たち一人一人に求められている現下の課題なのです。

イエス･キリストにおいて、神の約束はことごとく “然り” となりました(II コリ 1:20)。救済史の御業は神のものであり、信仰とはその御業への信頼だからです。　　　　　　　　　ハレルヤ、 アーメン。

# 10月10日　年間第28主日

王下 5:14〜17　IIテモ 2:8〜13　ルカ 17:11〜19

## 1. ルカ

v.11「イエスはエルサレムへ上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた。」

マタイ福音書がイザヤ書から引用しているように「異邦人のガリラヤ」と呼ばれ(マタ4:15)、また異教徒の町と見られてユダヤ人と対立していたサマリア人(ヨハ4:9)の町という、二つの地方の境界を舞台にしてこの出来事が起こりました。十人の重い皮膚病を患っていた人たちが清くされましたが、イエス･キリストへの信仰に到達したのは一人のサマリア人だけでした。ユダヤ人はイエスがキリストであることを理解せず、「この外国人」(v.18) がキリストの救いを受けました。

v.19「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」

## 2. 王下

アラムの王の軍司令官ナアマンは、重い皮膚病を患っていました。神の人エリシャは彼に、「ヨルダン川に行って七度身を洗いなさい。そうすれば、あなたの体は元に戻り、清くなります」と言いました。そして彼は清くされ(ルカ4:27参照)、イスラエルの神ヤーウェへの信仰に生きる人になりました。

v.15「イスラエルのほか、この世界のどこにも神はおられないことが分かりました。」

v.17「僕は今後、主(ヤーウェ)以外の他の神々に焼き尽くす献げ物やその他のいけにえをささげることはしません。」

すでにこの時代、イスラエルにはバアル礼拝が侵入して来ており、預言者エリヤとその弟子エリシャの物語りは“カナンのバアルに対するヤーウェ宗教の戦い”が主題であります。その物語りの中に、異邦人ナアマンのいやしと救いの出来事が語られているのです。

それから次の世紀(紀元前8世紀)になって、預言者イザヤはイスラエルを断罪して言いました。「牛は飼い主を知り、ろばは主人の飼い葉桶を知っている。しかし、イスラエルは知らず、わたしの民は見分けない。‥‥‥ 彼らは主(ヤーウェ)を捨て、イスラエルの聖なる方を侮り、背を向けた。」(イザ1:3-4)　イスラエルはその造り主を忘れ(ホセ8:14)、異邦人ナアマンは主の救いを得ました。

## 3. IIテモ

私たちキリスト信者は主日ごとにミサに集まり、そこで“ことばの典礼”と“感謝の典礼”を通してキリストの福音に生きていると自負して来ました。しかし今日、多くの信者が信仰している主は、「ダビデの子孫で、死者の中から復活されたキリスト」(v.8)でしょうか。旧約聖書の預言が実現して「ダビデの子孫から

生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められた」(ロマ1:3-4) 御子に関する福音を、信仰生活のよりどころとしている(Iコリ15:1)でしょうか。

多くのカトリック教会の教導書や聖書が、書店やインターネット通販を通して簡単に手に入り、だれでも聖伝と聖書を学ぶことが出来る時代に、私たちは生きています。「その響きは全地に、その言葉は世界の果てに向かう」(詩19:5、ロマ10:18) とある通りです。しかし、人は自ら聞き、自らキリストを信じることによってだけ、救われるのです。「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉(キリストの福音)を聞くことによって始まるのです。」(ロマ10:17)

キリストの救いは永遠の栄光(神の国への復活)を与えるものです(v.10)。洗礼の秘跡によって「キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きる(神の国を受け継ぐ)ようになる」(v.11) のです。この福音のために使徒たちは労苦しました。そしてその労苦は、実は復活された天上のキリスト御自身の労苦であり、今も続いています。「誰かが弱っているなら、わたしは弱らないでいられるでしょうか。誰かがつまずくなら、わたしが心を燃やさないでいられるでしょうか」(IIコリ10:29) と語った使徒パウロの言葉は、実は天上のキリスト御自身の今の叫びなのです。

「清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか」(ルカ17:17) と、現代の教会を憂えて語り、使徒たちが伝えた福音を「思い起こしなさい」(v.8) と私たちに呼びかけてくださっている天上のキリストに、私たちは今朝もミサの中でお会いしているのです。

この「聖書の学び」が「主の羊たちが御言葉によって命を受けるために」用いられますように。

アーメン、 ハレルヤ。

# 10月17日　年間第29主日

出 17:8〜13　IIテモ 3:14〜4:2　ルカ 18:1〜8

## 1. ルカ

v.1「イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。」

もちろんこの譬え話は、執拗に祈って訴えなければ人を顧みない不親切な神を述べているのではありません。そうではなくて、神の国の福音を信ずる者の取るべき姿勢と、“祈りは聞かれる”という信仰を励ますために語られました。祈りはキリスト教の信仰の旅路に属するものであり、私たち信者にとってとても大切なものです。

v.8「しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」

私たちキリスト者の祈りは、神の国の福音への信仰と切り離されてはなりません。その福音は御子に関するもので(ロマ1:3)、御子はダビデの子孫から生まれ、死者の中から復活され、神の右に上げられました。そして生きている者と死んだ者との審判者として再臨する日を待ち続けておられます。使徒たちはこのことの証人であり、聖霊もこのことを証ししてくださいます(使5:32)。私たちの祈りの古典的手本である“主の祈り”が、神の国待望、日常生活における神からの助け(日毎の糧)、罪の赦しと防御を主題としているように、祈りは神と神の国への信仰に基づいてささげられるものなのです。私たち現代のキリスト者の中にこの信仰は生きているでしょうか。21世紀の教会は厳しくこの問いの下に立たされています。

## 2. IIテモ

v.14「あなたは、それをだれから学んだか知っており・・・・・」

現代のキリスト者の多くは、キリストの福音をどこから学ぶことが出来るのかを知りません。また(事実上)多くの司祭たちが自分たちの宣教奉仕とは使徒たちの宣教の継続であることを適切に理解していません。21世紀の教会は刷新されなければならないのです(神の啓示に関する教義憲章 第2章)。使徒たちの宣教は聖伝と聖書によって伝えられて来ました。残念ながら現場のあの司祭この司祭がふさわしくその務めを果たしていない場合であっても、私たち信者は“信条”や“ミサ典礼書および各種儀式書”を通して自ら聖伝を学ぶことが出来ますし、聖書は優れた日本語訳によって自由に読むことが出来ます。

聖書についてなにがしかの講釈や解説を語る人はたくさんいますが、実際にはそのほとんどがろくに聖書を熟読していないことは明らかです。聖書が“読まれざる書物”となってすでに久しいのです。心ある神学者たちは、“聖書について学ぶ”ことよりも“聖書そのものを素読する”ことを勧めています。しかしそれは、あたかも“忍者の巻物”や“魔術の秘伝”を読むように、狂信的で盲目的なものであってはなりません。そうではなくて、現代の健全な学問的研究に支えられた“歴史的·批評的な”読み方でなければなりま

せん。使徒たちがどのように考えどのように判断したかを読み取り、聖書記者が何を伝えようとしたかに耳を傾けることが、聖書の素読の基本です。読者が自分の頭で考え、自分の心で感じることを、聖書の本来のメッセージに置き替えてはならないのです。そしてこのような読み方を可能にするものは、多くの無責任な解説者たちの尤もらしい説明ではなくて、何よりも読者自身の健全な姿勢であることを、強調したいと思います。

v.15「この書物は、キリスト･イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることが出来ます。」

自らは聖書をほとんど読みもせずに、“キリストへの信仰”“キリストの福音”“キリストの愛”などという言葉を自己流に弄ぶ現代の論者は呪われよ！ 復活のキリストは今朝もミサの中のことばの典礼を通して、特にその朗読される聖書を通して私たち会衆に語りかけておられます。

## ３. 出

v.11「モーセが手を上げている間、イスラエルは優勢になり、手を下ろすと、アマレクが優勢になった。」

これは元来、古い時代の預言者の所作の一つであったものと思われますが、後の時代の教会はこの物語りから祈りの大切さを学びました。しかし物語りそのものが古い時代の呪術的な要素を留めているとしても、教会の祈りは決して呪術的なものでも、まして神の主体性を人間が奪う手段でもありません。

教会の祈りは、キリストの出現(再臨)とその御国とを思いつつ(II テモ 4:1)という、福音への信仰に基づいてささげられるものなのです。そして神は教会に、そのような祈りを求めておられます。

「貧しい人々(ひたすら神に信頼して祈る人々)は幸いである。神の国はあなたがたのものである。」(ルカ 6:20)　　　　　　　アーメン、 ハレルヤ。

# 10月24日　年間第30主日

シラ 35：15b-17，20-22a　ⅡテモⅡ 4：6-8，16-18　ルカ 18：9～14

## 1．ルカ

私たちは福音書において、神の国の到来の日に人はどうなるのかを教えられています。イエスの福音が私たちに要求する第一のことは、近づきつつある神の国への備えをすることであり、それこそが使徒たちの伝えたイエスの姿でありました。

v.9「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対しても、イエスは次のたとえを話された。」

この譬え話の中でファリサイ派の人は、自分が神の前にいかに敬虔な生活をしているかを感謝して語っています。彼は偽ってはいませんでした。彼は本当に敬虔な人でありました。しかし彼は祈りの中でその自らの敬虔による特権を主張したのでした。

v.11「神様、わたしは ‥‥‥ この徴税人のような者でもないことを感謝します。」

近い将来神の国が到来する日に、聖なる神の御前に彼はどのようにして立つことが出来るのか。その日にはだれでも高ぶる者は低くされるのだと、イエスは語りました。徴税人は罪人であるが謙遜であり、彼は自らの将来を神のあわれみに託しました。神の国への備えとはこのようなものなのだとイエスは教えたのです。

イエスの教えをキリスト教的道徳の目録のように考えて、この世の争いをすべて調停し、あるいは社会的不正を取り除くすべての指針を聖書に求めるという間違いが、歴史の教会において繰り返されて来ました。しかしイエスの説教は神の国への備えをすること、その日に私たちはどうなるのかを教えるものであったと、聖書は伝えてい.るのです。

## 2．Ⅱテモ

使徒とは、「神の福音のために」(ロマ 1:1)「イエス･キリストと、キリストを死者の中から復活させた父なる神とによって」(ガラ 1:1) 召された人々であります。代々の教会はこの使徒たちの宣教を通して福音を聞いて来ました。司教とこれに従属する司祭たちの説教はこの使徒たちの宣教の継続であり、これに何か新しいことを追加するものではありません(教会憲章 25 参照)。“教導職は神のことばの上にある者ではなく、むしろこれに奉仕し、伝えられたことだけを教えるのである”(神の啓示に関する教義憲章 10)。

v.17「しかし、私を通して福音があまねく宣べ伝えられ、すべての民族がそれを聞くようになるために、主は私のそばにいて、力づけてくださいました。」

殉教の日を目前にして、使徒パウロは福音を語り続けていました。彼は信仰の戦いを立派に戦い抜きましたが、それでも福音宣教の仕事が終わった訳ではありませんでした。歴史の教会の宣教を通して、使徒

たちは今日に至るまで福音を語り続けて来たのです。

v.8「今や、義の栄冠を受けるばかりです。正しい審判者である主が、かの日にそれを私に授けてくださるのです。しかし、私だけでなく、主が来られるのをひたすら待ち望む人には、だれにでも授けてくださいます。」

21 世紀の教会も、この使徒たちの宣教、神の国の福音を聞いて歩んで行きます。使徒たちが伝えるイエスの説教は、神の国への備えをすること、その日に私たちがどうなるのかを教えるものでありました。

## 3. シラ

祈りとは、自らの将来を神のあわれみに託すことです。キリスト者の祈りは決して呪術的なものでも、まして神の主体性を人間が奪う手段でもありません。教会の祈りは、キリストの出現(再臨)とその御国とを思いつつ(II テモ 4:1)という福音への信仰に基づいてささげられるものなのです。そして神は私たちに、そのような祈りを求めておられます。　　　　ハレルヤ、 アーメン。

# 10 月 31 日　年間第 31 主日

知 11：22〜12：2　IIテサ 1：11〜2：2　ルカ 19：1〜10

## 1. ルカ

vv.9-10「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は、失われた者を捜して救うために来たのである。」

徴税人の頭というのは、ある一定の地域の関税の徴収をローマ総督から請け負って、多くの下請け人を使ってその責任を果たす裕福なユダヤ人のことであります。一般のユダヤ人からは、彼らはローマに協力する者、異教徒との接触によって汚れた者と見なされ、その裕福さとは対照的に、罪人の仲間として軽蔑されていました。

“救い”とは、来るべき神の国の民の中に加えられることであって、それがイエスの福音であると聖書は語ります。福音書によれば、イエスの説教は到来する神の国への備えを人々に迫るものでありました。自分の群れを探し出し、これを養い、到来する神の国に憩わせる牧者として(エゼ 34:15-16)、イエスは福音を語られました。

v.8「ザアカイは立ち上がって、主に言った。“主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。”」

彼の悔い改めは与えられた救いの結果であって、決して救いの条件ではなかったことに注目しましょう。そしてこれは通常の善行とは違っていました。たとえば最近の我が国で、多くの家庭がかつてのバブル期に較べて収入が 20~30%減ったということで立ち行かなくなり、自己破産や自殺に至っていることを考えてみましょう。企業の業績が前年比マイナス 10%となれば、新しい事業展開なしには倒産も必至です。現代のキリスト信者が聖書に、この世における倫理の基準を期待するのに対して、イエスの福音は到来する神の国への備えを人々に迫るものであったと、使徒たちは伝えたのでした。私たちは使徒たちの伝承を、聖書を通して聞かされているのです。

## 2. IIテサ

使徒パウロはこの手紙の中で、この使徒たちの伝承に言及しています。その「わたしたちが ･････ 伝えた教え」(2:15)「わたしたちから受けた教え」(3:6) と「人間の言い伝え」(コロ 2:8) とははっきりと区別されていて、キリストの福音の伝承の中で使徒たちは独特な位置を占めているのです。キリストの福音の伝承をこの一定のキリストの同時代人にのみ留保し、そのことによって人間の無能による福音の歪曲を最小限にくい止める必要性を認識したからこそ、第二世紀の教会は新約聖書の正典を編集したのでした。しかもその際、使徒に由来する文書のみを採用するという配慮をもって編集したことはよく知られていることです。

その伝承に関して「私たちの主イエス･キリストが来られることと、そのみもとに私たちが集められることについて」(v.1)、パウロはこの手紙で語っています。テサロニケの信徒たちがあらゆる迫害と苦難の中で

示している忍耐と信仰を思い、パウロは「私たちの神が、あなた方を(神の国への)招きにふさわしい者としてくださる」(v.11) ようにと祈りました。そして使徒たちの伝承に固く立ち続けることを勧めました。

3.

全世界の通俗的キリスト教は、すでに久しく聖書から離れて使徒たちの伝承を捨て、時代が求める新しい神々を作り出して来ました。いくぶんか聖書を重視する人々も、あたかも読者が使徒たちとは無関係に歴史のイエス像を直接そこから描き出すことの出来る書物のように考えて、いろんな種類の独自の“イエス教”を創出しています。“真の神は、使徒たちの伝承とは異なる方です”とか“真の神は名前を持っていないのです”というような滑稽な主張が、教会や修道会の現場で堂々と語られているのです。しかもそこで語られる“福音”も“信仰”も“愛”も“救い”も、使徒たちの伝承におけるものとは全く内容の違うものになっています。

二世紀の教会が編集し、代々の教会がこれを旧約聖書と共に正典として受け入れて来た新約聖書は、唯一の正当な伝承、すなわち使徒たちから伝えられた主キリストの福音だけを語る書物です。それは現代においても“教会に託された神のことばの聖なる委託物”(神の啓示に関する教義憲章10)であります。

復活のキリストは、今朝も私たちのミサを通して、洗礼の秘跡によってアブラハムの子とされたすべてのキリスト者(ガラ3:26-29参照)に悔い改めを呼びかけておられます。あなた方も「招きにふさわしい者」(IIテサ1:11) になりなさい！と。　　　　　　ハレルヤ、 アーメン。